湘洋中学校開校物語

昭和 31 年 3 月 15 日、毎日新聞の神奈川版トップに次のような記事が載っていました。

『実った母親たちの熱意』
―藤沢市の湘洋中近く完成―

藤沢市辻堂東海岸に 4 月 1 日から待望の市立湘洋中学校(校長加藤壽雄氏)が開校する。この学校は辻堂小学校 PTA 成人委員会の浮田さんや菅原さんら 20 余名のおかあさんが 3～5 キロも離れた遠い学校に通う子どもたちのいじらしい姿に胸を打たれ一致結束、約半年にわたる熱意と力強い母親のたちの愛情で金子市長や市教委、市議会を動かし、めでたく開校の運びとなったもので、全国的にも珍しいと教育界の話題になっている。(以下省略)

青空教室でも

昨今のこの地区の人口増加をみれば、いずれは湘洋中学が生まれただろうことは疑えない。しかし、このときの母親たちの力がなければ、開校は全く異なった紆余曲折を経たであろうこと、これも察するに難くない。

30 年 9 月、海岸中学建設促進委員会(会長魚津氏)が結成された。東海岸の子どもたちは当時遠路はるばる明治中学校まで通っていた。通学には鵠中のほうが近いのだがすでに詰まるだけ詰められて受入れ不能、そこで目をつけられたのが旧通信大学の老朽校舎だった。委員会は早速、地元 5 名の市議を説得するほか、2700 名の署名を集め、市議会に諸願文章を差出した。

＜明治鵠沼両中学校の生徒増加の緩和上、この方面の遠隔通学を解消する目的を持って旧通信大学の校舎および敷地を転用、市立中学校を新設し、明年 4 月 1 日を期して開港できるよう実現方を願いたい＞

実現はもちろん容易なことではなかった。委員会はたゆまず陳情を繰り返した。予算がなければ青空教室でもという意気込みと、市長のところまで、日に二回足を運んだこともあるという、母親ならではの熱意はとうとう市を動かしたのである。

子を思う故の衝突

2 月 6 日、加藤校長発令

2 月 9 日、改築工事入札

こうして、湘洋中学校建設の槌音が響き始めた中に、鵠沼地区では学区変更反対期成同盟が創られていた。辻堂地区児童だけでは規定の人員に達しないため、鵠中学区を一部削って湘洋学区としたものだが、湘洋で満足な学校生活ができるか否かが疑問とされたのである。双方、子を思う上の衝突だった。

無理もないことである。鵠中という立派な中学があるのに、つぎはげだらけの、設備もととの

わぬ中学へ通わなければならないのだ。おまけに湘洋中付近は淋しいところで、街燈もなく、道は悪く、日出橋などは老朽して危険だった。とても安心して子どもをやれる状態ではなかった。

しかし、これも鵠沼辻堂両地区および市の度重なる折衝の末、街燈、道路の整備、設備の充実、できる限り早く本建築に着手するなどの条件のもとにようやく足並みの一致をみたのである。

砂漠の中に

開校のための準備はやっと軌道に乗ったとはいうものの、校舎は改築中で足の踏み場所もない。加藤校長は片瀬中学校の一隅を借り受けて学校事務を開始した。いろいろと学校開設に伴う迷惑をかけ、あるいは好意を受けたという片中の当時の校長がわが大貫校長だったというのも奇しき縁である。

予定される男女 200 名の(いれものは、)砂漠の中に見捨てられた廃墟にも見まがう建物である。改築も、いずれは壊して新たに建て直されるものだから、最小限にとどめられた。そのため、校長室兼職員室兼事務室兼宿直室という、お客さんが眼を丸くするような、なんとも便利な部屋ができあがりました。事務費がない、お茶も薪も買えない。校庭の一部には私有地があり、生徒は以後 3 年もの間、借りものの土地を駆け回ることになる。事務費の捻出に自腹を切ったという校長、今は一致協力足しげく学校へ足を運んだ両地区のおかあさん、土地の持ち主、開校前後には様々な献身があった。

こうして湘洋中は

入学式、校舎も一応の体裁を整えた。長い産みの辛苦を味わった校長の眼には、まるで御殿のようにも映ったに違いない。ただし真新しい服装で整列した新入生の眼にはどう映ったか、これは察するにあまりある。

とにかく湘洋中学校は発足しました。開校に尽力した人々の感慨は、たとえば、4 月 1 日、校長自らの手による当直日誌が最も雄弁に物語るであろう。

現在の湘洋中学校に創立当時の面影はない。目覚ましい発展である。加藤前校長は発展を喜びつつも、こう語る。

「育ちの早い木はもろい。少しずつ目には見えないように育つ木は年輪のきめがこまかく、逞しいものである。」

創立 50 周年記念誌より